

若山牧水生涯の友・佐藤緑葉「年譜」再考  
-評伝『若山牧水』の執筆事情-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学図書館 公開日: 2024-05-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊能,秀明 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/0002000434">http://hdl.handle.net/10291/0002000434</a>

# 若山牧水生涯の友・佐藤緑葉「年譜」再考 —評伝『若山牧水』の執筆事情—

伊能 秀明\*

## 1. 略年譜における執筆年

佐藤緑葉著『若山牧水』は、牧水研究に不可欠の文献である。4つの略年譜は、執筆年を下記のとおりとする。

①伊藤信吉『佐藤緑葉の文学』（塙書房、1999年3月）

「昭和二十年（一九四五）五十九歳 日本敗戦。郷里の実家で若山牧水の評伝執筆」（284頁。伊藤は群馬県立土屋文明記念文学館長。略年譜は、緑葉旧門下で近代文学研究家の福田久賀男編。奥付に「土屋文明記念文学館リブレ」と銘打つ）

②群馬県立土屋文明記念文学館編・第9回企画展図録『佐藤緑葉と伴に』（2000年6月）

「一九四五 昭和二〇 この頃、郷里の実家で『若山牧水』を執筆する」（65頁。伊藤『佐藤緑葉の文学』の略譜を底本に、伊藤らの教示で展示資料を加味し作成）

③伊藤信吉編「（佐藤緑葉）年譜」（『群馬文学全集7 佐藤緑葉・白石實三・田中辰雄』、土屋文明記念文学館、2000年6月）

「一九四五年（昭和二〇年）五九歳 この頃、実家で評伝『若山牧水』

---

\*いよく・ひであき／元明治大学調査役

を執筆」(231頁)

- ④伊藤信吉編「(佐藤緑葉) 執筆・発表作品目録」(『群馬文学全集7』)  
「昭和二十二年(一九四七) この年九月『若山牧水』刊。したがって  
この年、もしくは前年より書き下ろしたものと推定」(240頁)  
①②③で、緑葉は昭和20年郷里の実家で『若山牧水』を執筆したという。  
③④は伊藤編で、④は昭和22年もしくは前年といい、③と矛盾する。

緑葉一家は戦火を避け、群馬県吾妻郡<sup>あづま</sup>東村五町田(現、東吾妻町)<sup>こちようだ</sup>の  
「<sup>かのうや</sup>叶屋」佐藤家に一時疎開した。疎開は、空襲の被害を減らすため密集す  
る人・物を分散するもので、家財一式を移す引越と違う。戦中、軍需優先  
で輸送手段や乗車券の調達は容易でなかった。疎開中、もし実家で執筆し  
たなら、文献利用や出版交渉はどうしたのか疑問を持った。

『若山牧水』の執筆事情を述べた先論は、見いだせなかった(都立図書館  
館教示)。

年譜の作製は「普通、年譜の作り方としては五つの段階がある。その第  
一は作家の日記、書簡を中心にして、年譜の骨格をなす中心部分を作り上  
げる仕事」から始まる(岩城之徳「年譜の作り方」、『国文学 解釈と教材  
の研究』28-6臨時増刊、昭和58年)。

群馬県立土屋文明記念文学館は、高崎駅の北北西、上毛野<sup>かみつけの</sup>はにわの里公  
園にある。同館は、佐藤緑葉の資料を特別資料、図書、雑誌、緑葉研究、  
関連資料に分類し保管している。緑葉は日記や書簡を多く遺した。亡父(緑  
葉の従弟)も日記を書いた。日記の習慣は佐藤家の流儀かもしれない。

前記①から④の出版物の公共性と「知る権利」に鑑み、私は、同館蔵の  
緑葉日記で『若山牧水』執筆に関する記事を調査した。

先に私見を示す。

①②③④の当該記事は、緑葉日記の記事と齟齬があった。各編者は、興  
風館版『若山牧水』の序、自序、315頁末行の「昭和十九年十月三十日」  
の脱稿日付を等閑視したと推察した。

以下、緑葉日記から『若山牧水』執筆に関する記事を抽出し、その事情  
を語らせた。

## 2. 緑葉の執筆構想

日記の題は「風雲月露」に因み、「風露滴々」「点滴録」は「風露をして点滴せしむ」の意。「点滴録」「風露滴々」「諦聴樓日記」の各年次に、牧水伝の執筆経過が綴られていた。年月日は洋数字で記し、曜日天候は省略。長文は要約し、伊能の注は〈 〉で示した。自宅は、東京府豊多摩郡杉並町天沼 460 (2丁目 460) 番地にあった。

昭和 18 年 3 月～ 19 年 5 月〈表紙に「牧水評伝」と記す〉

### 若山牧水伝

明治思想史を背景として、わが成長を中心とし、トルストイやイブセンや、エマスンやカーライルや、ツルゲーネフや、ハウプトマンや、モオパッサン、又雑誌等に紹介せらるるシェンキウイツや鷗外の翻訳物や、其他に触れつつ、又国内の作家、流行非流行、三島霜川や長谷川某や菊池暁汀や、それらにふれつつ、若山牧水伝をかくこと、

自由自在なもの、周囲との交渉、金子薫園を訪ね、〈与謝野〉鉄幹に会い、其他の文学者文士等に会い、さうした中に成長して行った彼を描いて、時代の空気を盛り上らしめること (単行本)

北光書房 (1948 年頃まで東京市芝区新橋 1 - 24 にあった出版社) に前記牧水伝又は研究物の出版を交渉すること

明治時代は解放の時代である。(中略) 牧水はかうした時代にはあらはれて、しかも自らは日本趣味の真髄に没入せんとしたのである

### 牧水伝起稿に就て

明治三十七年新橋駅へついた一少年より着筆。

明治三十七八年より四十二年へかけての思想界の空気

牧水の歌の情調に最も通ふものは藤村の若菜集だ。

頼山陽も牧水に似てゐる 歴史趣味を異にして

一卷三〇四～三〇一〇〈改造社版『牧水全集』巻 1・304～310 頁「火の山」浅間山麓の旅の歌〉あたり絶唱多し

满目荒涼、人生荒涼を歌へる歌が多いが、其格調、其哀傷其情調は、反対に人生に一種の緑地を添えるの感あるは不思議である。

犬や猫などに戯れる歌もある。寂しさの余りだ。

あの頃悲しむならばもっと徹底的に、強く深くと傍観したが、彼の  
ちっと持ちこたへる力にはそれよりも深い悲しみと寂しさがあつた。

尤も彼自身も不徹底を齒がゆがってはゐたが

牧水の歌の中心は失恋と、寂寥と、自然愛と人間愛

彼の歌は彼の紀行でもあり人生観、自然観でもある

牧水の紀行文は散文で書いた歌だ

伝記（上京、学生時代、恋愛）

作品大観

歌論、彼の思想

紀行（彼の紀行は彼の歌と離して考へる事の出来ぬものだが、し  
かし独立の紀行として無類のもの）

彼の野心、晩年の生活、安居（以下、主な記事を摘記する）

牧水伝起稿に際し、牧水の作に不満を感じずるものある時、折々以上のや  
うな気持（この前行に、自由に本を読める時代、孤島に漂着した等の場合、  
流人になった場合をあげ、「どんな本でもいいから本がほしいと」思う気持）  
を感じさうな気がする。

他の歌人の熱意なき小手先の技巧を見る毎に流石に牧水の作には実感か  
ら来た作が多いといふことを感ずる。

牧水の歌の特色。梅、山桜、富士、海士、母を思ふ歌、元來孝行者だが、  
自己の行く道に専心し、当初は十分の余裕なく、結果として不孝の形となっ  
て悔いてゐる

海の声、独り歌へる等幼稚なものから、牧水調ともいふべき韻律が流れ  
てゐるを特色とする。

普通の人的心境に触れる作が多い。

大なる飛躍、凡人にはついて行けぬやうな高い処へ飛行してゐない。そ  
れだけ普通人の共感を買ふべき感情が流れてゐる。凡人にも人間としての  
悲しみや、苦しみや寂しさや、無常やは経験される。其凡人の心にふれる  
ことは、やがて人間の心にふれることでもある。

犬を相手にするにも、失恋時代と三卷一〇七頁辺（改造社版『牧水全集』  
卷3・107頁に犬の歌2首あり）では大分異がある。失恋時代の方が哀切  
である。

山桜の歌は全十五巻を通じて何れもよい。牧水は山桜の詩人である  
旅行するも、歴史地理に興味を起さず、自然を喜ぶことと、自己の寂し  
さと、人生の苦悩とが大体の主題となつてゐる。

時雨、富士、松等の歌は概してよい。秋の歌もよい。せきれいの歌もよ  
い

上州の山の歌よし、白骨方面、焼嶽の歌よし

旅をしつづけて心が澄んだ歌はよい。

旅の心に打ちひたつてゐる歌は概してよい。

音読のことがある。牧水はよく〈国木田〉独歩の小説を音読した。僕も  
真似をしたことがあるが、やがて元の黙読に返つた。音読、黙読、その人  
の素質によるのであらう

### 3. 『若山牧水』の執筆事情

#### (1) 昭和19年〈10月2日第17章着筆、10月30日脱稿〉

8月14日、七月上旬より過労の気味、十六日夕より発熱肺炎となる。以  
来十七日、八月二日起床。

8月30日、十七日頃より風気にて微熱、二十二日には八度五分余になる。  
肺炎再発かと多少懸念。

10月2日、牧水評伝第十七章「旅と紀行」を書き始めた。病後の為先頃  
来『天寶』一、二、三を書くに甚だ骨を折つたが、漸く調子が調つて、  
筆が調子よく進み始めた感がある。

10月3日、執筆午前と夜、頗る快速調ですすむ。

10月25日、牧水評伝最後の一章に突入した

10月31日、先日来両三日風気にて休養せる為、牧水評伝を昨三十日漸く  
脱稿。本日早朝伊東よちよさん〈旧門下、出版社の北光書房勤務〉に  
電話して出版を交渉した処早速夕刻来宅、快く出版してくれる事にな  
り原稿を依託する。(中略)原稿は半折一千四十二枚、四百字詰にして  
五百二十枚である。十分に書き得たとは云へぬが、久しぶりの著述と  
しては凝滞なく筆の進んだ感があった。

11月2日、午後若山〈喜志子〉夫人へ手紙して原稿脱稿と序文委嘱、

- 11月3日、牧水年譜作製午前より夕刻に及ぶ。
- 11月4日、午前年譜作製終了。
- 12月1日、予は何とかしてこのまま東京にとどまり、この戦争の終末と、そこへ行くべき道程の種々相を見たく、弾雨の中に思惟と執筆とをかさねたきものと希って已まぬ。
- 12月24日、夜、大悟法利雄氏来訪、『若山牧水伝記篇』を一部恵贈さる。三千部印刷したるが、神田の製本屋にて其中の一部分千三百部程を焼きし由。〈伝記篇奥付に「昭和十九年十一月二十日初版発行二〇〇〇部」「出文協承認い410043号」と記す〉
- 12月27日、よちよさん来訪。十月脱稿の書を今年中に企画届として出す由。二十年度第一期（一月より三月まで）の最初の物としての由。
- 12月29日、新橋にまわってよちよさんと会見、「牧水伝」の原稿を受取り帰る。昨日企画届を出せる由。

## (2) 昭和20年〈出版延期、疎開、終戦、原稿再閲〉

- 1月2日、牧水伝原稿訂正。
- 1月18日、午前牧水評伝の序文を起稿す。
- 1月19日、午前中序文脱稿、
- 1月31日、午後よちよさん来訪、日本出版会より予の原稿を提出せよとの通報ありし由。
- 2月14日、若山旅人氏、文六氏より来信〈旅人は牧水長男、来信は牧水写真の件か。文六は緑葉弟で赤城村溝呂木<sup>みせろき</sup>の南雲家へ養子縁組。のち緑葉の妻子は、南雲家へ最初に疎開。現、渋川市赤城町溝呂木〉
- 3月20日、午前田部〈重治〉氏来訪、牧水評伝の序文を草し来って渡される。(中略)夜、よちよさん来訪、牧水伝を印刷に附する事を今少し待ってくれとのこと。
- 3月24日、夕刻「牧水評伝」の自序を検し、更に追記を書き加へ
- 4月9日、夕刻よちよさんと会見、「国民歌人若山牧水」は出版会より許可が出たといふ報をきく。
- 4月22日、伊東よちよさん来訪。先日の空襲で北光書房関係の印刷屋三軒焼失し、組版中の書物原稿も焼失、一回毎に損失が加はるので、手持の紙を田舎の安全な処に移し、紙型を保存し、仕事の出来る時期ま

で一時出版を中止する事に決した旨語られる。予の作「若山牧水」も従って無期延期の筈。

4月25日、桂〈桂子、緑葉の後妻〉子供らと溝呂木、南雲家へ疎開。緑葉は自宅に残る。

5月16日、上野8時半発、夕刻五町田〈東村、「叶屋」佐藤家〉着

5月17日、渋川経由、溝呂木の弟・南雲文六宅訪問

5月19日、子供を連れ溝呂木発、渋川経由、五時半の最終バスに乗車し得て日没頃五町田へ着き疎開生活に入る〈6月5日桂との長女・あすか死亡。10日上京、7月11日再帰郷、のち9月15日原町へ移転〉

7月12日、いよいよ何処へも行けぬ疎開地生活が始まる。先月十日上京して以来全く安全だった東京なので、今頃まで「あこ」〈あすか〉と一緒にゐたらよかったのにとくやまるる事切である。

〈略年譜①は「昭和十九年（一九四四）五十八歳 七月、群馬県に帰郷」、②は「一九四四 昭和一九 七月、群馬県赤城村に住む実弟南雲文六の元に疎開。一九四五 昭和二〇 春、東村五町田の実家に再疎開」、③は「一九四五年（昭和二〇年）五九歳 春、南雲方から東村五町田の実家に再疎開」とする。どれも日記の日付と不一致。〉

7月31日、桂子午後自転車にて中之条訪問（中略）町田家〈名家「ちぎりいち」町田儀平商店、緑葉長男・静樹＝のち毎日新聞東京本社印刷局副部長＝の妻「ふみ」の実家）に預けて置いた牧水評伝原稿其他を携へて夕刻帰宅。

8月15日、〈玉音放送、終戦〉

9月15日、桂子、県立吾妻高等女学校〈県立吾妻高校を経て県立吾妻中央高校へ統合〉英語教員就職〈9月17日～昭和21年8月31日在職〉で五町田から吾妻町原町〈現、東吾妻町〉へ一家移転。

9月27日、〈五町田疎開生活の不如意を嘆じ所感を記す。ただ佐藤家では、嫁の正子が衰弱した幼女あすかに乳を飲ませ、食器を洗い配給品を分け農産物も収穫させた。正子編『若山牧水の親友 伯父佐藤緑葉の覚書』5～7頁〉

10月8日、牧水評伝に手を入れて置くべく出して見た。戦争終結の結果として、序文其他に一二ヶ所訂正して置く必要があるからである。



10月9日、牧水の原稿を訂正して午前を過ごした。

10月10日、牧水評伝原稿四までを見返へす。

10月11日、郵便局に新井〈元八郎〉局長を訪ねて「牧水評伝」の郵送に就て相談し、原稿の内見を頼んで帰宅した

10月19日、「雲と落葉」及び「牧水伝」の原稿を小包として長崎氏〈飯田町新教出版社長崎次郎、現千代田区飯田橋〉宛発送、三キロ七〇〇であった。

11月12日、午後桂子激発〈この前後から、しばしばヒステリー症状をおこし周囲と対立〉

**(3) 昭和21年**〈帰京、興風館の出版確定、印刷入稿〉

2月25日、肺炎と胃潰瘍で臥床。

5月31日、右肺が深く呼吸すると痛むが癒着のためだけであらうか。

7月14日、和泉屋〈中之条の老舗茶舗〉にて小憩。チギリ<sup>いち</sup>ーにふみを訪ねて休憩。

7月22日、飯田町新教出版社に長崎次郎氏を訪ふて牧水原稿を受取り

9月12日、中之条方面へ挨拶、山十<sup>やまじゅう</sup>〈小池善吉・群馬大教授の実家〉、和泉屋、チギリイチ、田中平太郎〈亡妻<sup>とう</sup>董の実家〉、入院中の小池善吉を見舞い、芳桂堂〈薬局〉へ。

9月15日、夕刻6時半トラックで原町から引越出発、16日朝8時自宅着。

10月15日、午前中、牧水伝の序文の書きなほしに費す。

10月24日、桂子が北光書房へ原稿取戻しの交渉に出かけた

11月14日、羽生氏〈旧友、羽生操〉よりハガキ。羽生氏のハガキは「牧水伝」出版を興風館が承諾した旨を伝へ来る。

12月12日、午後興風館の森田寛君来訪、「牧水伝」の出版確定、一月中には組みを終る予定などの話をする。

12月19日、牧水評伝の訂正にかかる。昨日午後興風館の森田氏より届けて来たのである。20日、21日もそれに没頭する。

12月23日、終日原稿訂正に没頭する。連日原稿訂正。26日、一応訂正を終る。

12月27日、訂正箇所を再検などして一日を過ごした。

12月30日、朝食後「牧水」の原稿を野方の森田寛君宅へ持参し、直ちに

## 帰宅

### (4) 昭和 22 年〈校正、出版〉

- 1月22日、神田、教育会館に興風館を訪ねて得ず
- 1月24日、朝食後野方の興風館事務所へ行き、森田寛君に会って用務を弁じ、其足で神田小川町三和銀行へ行って現金を受け取り十二時帰宅した。
- 2月9日、朝食後興風館を訪ふて森田君と要談し、十二時帰宅。
- 2月12日、興風館より稿料二回分として千五百円を届け来る。
- 2月16日、桂との次女百代誕生。
- 3月30日、朝食後野方に森田氏を訪ねたところ、二三日前神田猿楽町の事務所へ引移したとのこと故、直ちに神田へ行って漸く探し当てたら今外出したといふ。
- 3月31日、予は神田に森田氏を訪ね要談
- 4月11日、桂との長男整毅、小学校入学。
- 4月14日、興風館を訪ふて稿料千円を受取って帰宅。
- 5月6日、帰ると校正が百六十頁出てゐる。
- 5月7日、十二時〈正午〉過帰宅、校正にかかる。
- 5月14日、アルコールを過ごし、いささか重苦しい気持で起床したが、直ちに校正に着手し、終日努力、約半分以上を終了して夜に入った。
- 5月15日、相不変校正に努力し、夜に入って終了、年譜を余すのみとなった。三百余頁〈総 324 頁〉を一気に終ったので、心身ややしびれる感があった。
- 5月16日、朝食後少時にして年譜〈興風館版 317～324 頁に該当、「大悟法利雄氏の調査による」と記す〉の校正も終了
- 5月30日、再校到達、初校と校合してゐるところへ田部〈重治〉氏来訪により暫く会談。後刻又校正夜に入る。
- 6月2日、神田に興風館を訪ねていろいろ話し込み、五時過の電車で帰宅した。
- 6月3日、吉祥寺で靴を注文、千六百円。
- 7月19日、午前中神田の興風館を訪問して用務を弁じ
- 7月24日、午後森田氏来訪、四千円稿料を受取る。

- 9月5日、午後興風館訪問、社長と時事に就て話す。今は一冊の本を出すにも四十万円位を要し、昔は紙は六十日目に、印刷製本は一ヶ月目ト手形払ひでよかったのが、すべて現金、しかも前金払ひになったから苦しい話などをする。
- 9月7日、森田君と平家〈物語〉の研究、内村鑑三の小説の出版計画を話す。
- 9月13日、興風館に森田氏を訪問、今後の原稿に就て大要打合せ、小切手千五百円を受取り
- 9月25日、夕刻興風館より検印用奥付を届けて来たため、夕食後その押捺を自ら施して午後九時に及ぶ。
- 9月26日、昨夜捺し残した検印二千五百を自ら押し、朝食を終わった（中略）昼前興風館より検印とりにくる。
- 10月3日、朝食後本が出来たか見たく興風館へ行く。見本だけ出来てゐる。
- 10月6日、麴町より神田興風館に廻ったが、まだ本のカヴァーが出来ないとのこと。
- 10月14日、興風館より林君来宅、稿料六千円持参
- 10月20日、夕刻神田興風館へ行った処、漸く本が二十冊出来て来たとして、其うち十冊受取って帰った。今時としては美しく出来た方である。

日記の引用は以上である。筆跡は後年の冊ほど読み易く、一級資料が温存されていた。

構想から出版までの経緯は、下記の10点に要約できる。

- ①執筆・出版の構想は、昭和18年3月から19年5月までの「点滴録四」に見える。
- ②「風露滴々」昭和19年10月2日、牧水評伝第17章「旅と紀行」を書き始め、10月30日、自宅で牧水評伝を脱稿。原稿は半折1042枚、四百字詰520枚。
- ③昭和20年1月19日、自序を脱稿（印刷では昭和21年10月15日）。3月20日、田部重治より序文原稿を受領（同、昭和21年10月）。3月24日、自序の追記を脱稿。
- ④4月22日、空襲の激化で、北光書房から出版延期と告げられる。
- ⑤5月19日、五町田へ着く。7月12日、疎開地生活が本格化。7月31日、

中之条町の町田家へ預けて置いていた牧水評伝原稿を桂子が持ち帰る。

- ⑥ 9月15日桂子が吾妻高等女学校に就職し、五町田から原町へ移る。  
10月8日以降、牧水評伝を手直しする。
- ⑦ 10月19日、「牧水伝」原稿を飯田町、新教出版社長崎次郎へ発送、  
翌21年7月22日、新教出版社を訪ね牧水原稿を受取る。
- ⑧ 昭和21年9月15日、夕刻トラックで原町から出発、16日朝自宅着。
- ⑨ 12月12日、興風館から「牧水伝」出版が確定する。12月30日入稿。  
昭和22年5月6日初校、同月30日再校が届き、9月25日検印用奥付に押印、10月20日興風館で10冊受取り、緑葉は「今時としては美しく出来た」と感じた。
- ⑩ 稿料は、前払いを含め、興風館が計14,000円と昭和22年1月24日の現金を支出。当時の物価は、豆腐1丁1円、米1升9円81銭6厘、銭湯代4円、理髪料10円、駅弁幕の内並10円、毎日新聞月ぎめ朝刊購読料20円（東京の各価、松浦総三『原稿料の研究』）。昭和23年の国家公務員初任給は、大卒2,300円、高卒1,500円（『完結昭和国勢総覧3』56頁）。緑葉は、昭和22年6月3日1,600円で靴を注文した。

緑葉は、昭和19年10月30日東京の自宅で「牧水評伝」を脱稿した。伊藤館長らは、「緑葉は郷里の実家で評伝『若山牧水』を執筆した」と書いた。最長約4か月間の五町田滞在中、牧水評伝を執筆した証跡はない。

#### 4. 『若山牧水』の目次・奥付

『若山牧水』は、興風館版、角川文庫版とも稀覯である。各版の目次・奥付を掲載する。

目次（興風館版）	（角川文庫版）
序 昭和21年10月 田部重治	〈なし〉
自序 昭和21年10月15日 著者	〈なし〉
追記	〈なし〉
目次	目次

- 一 はしがき
  - 二 めざめ
  - 三 上 京
  - 四 早稲田生活
  - 五 あらしとせまり
  - 六 文壇の動き
  - 七 北斗会と六時會
  - 八 一切か無か
  - 九 もだえ (一)
  - 一〇 もだえ (二)
  - 一一 もだえ (三)
  - 一二 すくひ
  - 一三 内 観
  - 一四 天賚 (一)
  - 一五 天賚 (二)
  - 一六 天賚 (三)
  - 一七 旅と紀行
  - 一八 歌 論
  - 一九 拾 遺
  - 二〇 むすび
- 若山牧水年譜

**奥 付**

昭和廿二年九月廿日印刷

昭和廿二年九月廿五日発行 価七五圓

- 一 はしがき
  - 二 めざめ
  - 三 上 京
  - 四 学生生活
  - 五 「あらしとせまり」
  - 六 文壇の動き
  - 七 北斗会と六時會
  - 八 「一切か無か」
  - 九 首 途
  - 一〇 懊 惱
  - 一一 放 浪
  - 一二 すくひ
  - 一三 内 観
  - 一四 山桜の歌
  - 一五 旅の歌
  - 一六 富士の歌
  - 一七 旅と紀行
  - 一八 歌 論
  - 一九 補 遺
  - 二〇 むすび
- 年 譜

昭和三十一年一月五日初版印刷

昭和三十一年一月十日初版発行  
価七拾圓

興風館版は、国会図書館デジタルコレクション図書館送信参加館・個人送信限定で公開。明治大学図書館蔵本2冊は、昭和23年5月興風館増刷版で価100円。もとは、ビワの実を描いたカバー装付き。

## 5. 興風館版『若山牧水』序、自序

『若山牧水』執筆にかかわる記事を田部重治の序、自序から抽出する。執筆の経緯は、日記の記事と符合する。文中の「再閲」は、見直しをする意である。

### 序

私は試みに〈牧水評伝の執筆を〉すゝめて見た。同君〈緑葉〉は前々からその企てをもっているといふことで心よく引受け、一昨年〈昭和19年〉春から筆を執り始め、一昨年秋に至って完成するに至った。(中略)

昭和二十一年十月 田部重治

### 自序

旧友若山牧水の回想録に筆を染めることは私の積年の願ひの一つであった。偶々牧水の愛読者である田部重治君が切にそのことを勧めてくれた(中略)本書は昭和十九年五月に筆を執り始めたのであった。(中略)本書は同じ年の十月末日に一応擱筆することが出来たのである。(中略)その後の戦局の進展と、出版界や印刷界の被った影響とを考へると、本書の原稿が生き残ることが出来たのは全くの奇蹟である。昭和二十年七月、私は戦塵を避けて郷里の生家〈五町田「叶屋」佐藤家〉に近い小さな町〈9月吾妻町原町へ移転〉に疎開した。そこで静かに本書の原稿を再閲した。再閲して私はこれ以外に私としては筆を進めることが出来なかったことを確かめ得た。(中略)

本書が世に出るに至ったのは、旧友羽生操君及び私の旧門下伊東よちよさんの斡旋の賜物である。(中略)このやうな体裁で世に出ることが出来たのは、全く森田寛君の努力によるのである。(中略)

昭和二十一年十月十五日 著者

伊東よちよは、本名「小野ヨチヨ」。大正2年5月鹿児島県奄美大島生まれ。名瀬実科高等女学校卒、経済的事情で数年間小学校の代用教員を務め、22歳で横浜在の姉夫妻を頼り上浜。苦学のすえ日本女子高等学院・英文科(現昭和女子大)を昭和15年3月卒。昭和17年8月から母校で英

語を教え、寮の舎監を兼任。寮生に寛大すぎると叱責され、辞職。昭和18年から2年間北光書房勤務。女学校教員を経て昭和25年5月京浜女子短大助教授。昭和34年4月京浜女子大教授（現鎌倉女子大学）。昭和55年3月5日没、享年67。略歴は、3月10日朝日新聞神奈川版「死を悼む教え子たち」、伊東千代治・静子（故人の姪）夫妻編・発行『文学への窓 小野ヨチヨ遺稿』（1986。都立図書館教示。横浜市立中央図書館蔵）参照。『遺稿』82頁以下で牧水「幾山河」の歌を論じ、「遠い昔、私はある一人の先生を心から尊敬した」「先生って海のような人なんだ」という述懐は、緑葉を指す可能性が高い。翻訳に『ローラ殺人事件』（早川書房）ほか多数。緑葉は、長男静樹、旧門下の福田久賀男・三浦淳二とヨチヨに、没後の処理を託した。

## 6. 結 言

緑葉は、昭和19年5月東京の自宅で「牧水伝」を起筆、10月末に脱稿した。20年4月北光書房から『国民歌人若山牧水』の題で出版が決まったが、空襲激化で延期。20年9月15日疎開先の東村五町田から吾妻町原町へ移り、原稿を見直し、21年9月16日自宅へ復帰。その前後、新教出版社、北光書房へ出版交渉した。21年12月12日興風館から出版が決まり、22年10月20日『若山牧水』が出版された。戦中戦後の混乱のさ中、本書の原稿が生き残れたのは奇蹟だった。

牧水没後95周年（2023年9月17日）を契機に、牧水伝の執筆事情に注目した。緑葉は、精魂込めた著述や戦時中に舐めた辛酸、関係者の骨折りを日記に綴った。彼は法政大や東洋大の教壇生活が長く、文壇で存在感は希薄だが、牧水伝出版は生涯のハイライトである。本稿が、評伝『若山牧水』の読解に資することを願い擱筆する。

（付記）明治大学図書館紀要27の前稿52頁で、つぎの3点を保留した。

桂が昭和18年9月実践女子専門学校英文科を卒業した記録は、『昭和二十九年十二月 会員名簿 実践女子学園櫻同窓會』（実践女子大学図書館蔵「下田歌子資料」）。

桂は昭和15年9月緑葉と結婚、日本女子高等学院中退。緑葉の斡旋で10月24日受験し、実践女専英文科に入学。昭和18年2月13日英文科を廃止する学校方針に学生が蹶起し、当局に存続を訴え容れられた一幕があった。桂の父は石川章四郎で、明治38年3月旧制会津中学卒、福島県若松市大町名子屋町、若松駅前で石川運送店を経営（会津若松市立会津図書館教示）。昭和18年11月7日病死。母ヒサ、妹の直（直子）は上京、緑葉の家庭に同居。石川家の本籍は福島県耶麻郡西会津町群岡下野尻（むらおかしものじり）にあり、本家当主は石川章（緑葉日記による）。

最後の旅宿「松笠旅館」、死亡推定地「八王子市上長房二七一番地」は別稿で述べる。

年譜は「実証的資料として作品を裏側から支える」「すべて年譜が正確緻密であること—これは分りきった前提条件である」（『年譜』というものの）、『新潮』59（10）、1962年10月）、伊藤信吉はこう弁じた。口では大阪の城も建つ。日記・序文は一顧だにされず、粗忽な年譜が続刊された。件の館長に伏線を張られたら、後進は不審を覚えても異を立てにくかったかもしれない。『若山牧水』執筆年次の錯誤は、1999年3月から四半世紀ぶりに匡正できた。係員の閲覧対応に感謝したい。

（調査協力）本文に記載のほか、明治大学中央図書館、株式会社明大サポート、板橋区立志村図書館、福島県立図書館地域資料チーム、中之条町ツインプラザ図書館、小清水和彦行政書士事務所に深謝したい。